

〔論文〕

『西東詩集』：「寓意の巻」について

鈴木 邦 武

「寓意の巻」〈MATHAL NAMEH/Buch der Parabeln〉は『西東詩集』の10番目に置かれている。ゲーテは、「注と論考」の「将来のディーヴァン」の項で「寓意の巻」について「西方の諸国民はオリエントの富から多くの事柄を吸収してきたけれども、まだ様々に学び取らなければならないものがある」¹⁾として、「寓意 (Fabel)」というものもオリエントにおいては重要な文学様式の一つとみた。

ゲーテがここでペルシア語のタイトルとして〈MATHAL〉をあげている。〈MATHAL〉はアラビア語でも同じであって、これの基本的な要素として《The Encyclopaedia of Islam, New Edition》²⁾では、「比較 (比喩的な表現)」「簡潔さ」「親密さ」の3点を挙げている。〈MATHAL〉は経験に基づくものとされ、従って実際の常識に基づいているとされている。〈MATHAL〉の使用によって間接的にはあるが鋭く明解な表現が可能となり、より直接的な表現が困難であるような事柄についての伝達には有効であるとしている。また、〈MATHAL〉は、英語の〈proverb〉〈proverbial saying〉〈set turns of speech〉〈parable, fable〉などよ

り広い意味で用いられているとしている。

この〈MATHAL〉と併置されているドイツ語は〈Parabel〉である。この〈Parabel〉について『グリム辞典』では、ラテン語の〈parabola, parabola〉に基づくもので、もともとは「併置」「比較」の意味とし、〈das gleichnis, rede oder dichtung in einem gleichnisse〉「比喩」と説明しており、〈eine fabel ist eine parabel, und eine parabel ist eine fabel〉というような例文もあげている。

しかし、レッシング (Gotthold Ephraim Lessing, 1729-1781) とヘルダー (Johann Gottfried von Herder, 1740-1803) は〈Fabel〉と〈Parabel〉とを区別する。

レッシングは、『イッツプ物語』のつぎの話を取りあげ、

「海狸 (ビーバー) は湖に住む四足の動物である。その生殖器はある種の病氣治療に有効だと言われるので、人間が海狸 (ビーバー) を見つけて追いかけると、何のために追われるのか知っているものだから、あるところまでは足の速さを頼んで逃げ、体を無傷に保つが、いよいよ追いつかれそうになると、自ら生殖器を切り取って投げ、こうして命を全う

するのである。

このように人間の場合でも、財産ゆえに狙われた時、命を危険に晒すようなことはせず、財産を見切る人こそ、賢明なのだ。」³⁾

この部分のプラヌデス (Maximos Planudes, 1260?-1310?) によって散文訳されたもの

(Der Biber ist ein vierfüssiges Thier, das meistens im Wasser wohnt, und dessen Geilen in der Medicin von grossen Nutzen sind. Wenn nun dieses Thier von den Menschen verfolgt wird, und ihnen nicht mehr entkommen kann; was thut es? Es beißt sich selbst die Geilen ab, und wirft sie seinen Verfolgern zu. Denn es weis gar wohl, daß man ihm nur dieserwegen nachstellet, und es sein Leben und seine Freyheit wohlfeiler nicht erkaufen kann.)⁴⁾

について、海狸 (ビーバー) という「種」全体が取り上げられていて、「個」としての海狸 (ビーバー) が語られている訳ではないので、現実性に欠けているため (Fabel) とは言えないというのである。

「(Fabel) が成り立つ個々の場合が現実的なものとして思い描かれなければならない。もし私はその可能性で満足してしまえば、それは (Beispiel) であり、(Parabel) ある。」⁵⁾ とレッスینگは言う。そして、もう1つの例をあげ、

(Die Affen, sagt man, bringen zwey Junge zur Welt, wovon sie das eine sehr heftig lieben und mit aller möglichen Sorgfalt pflegen, das andere hingegen hassen und versäumen. Durch ein

sonderbares Geschick aber geschieht es, daß die Mutter das Geliebte unter häufigen Liebkosungen erdrückt, indem das Verachtete glücklich aufwächst.)

(サルが2匹の子を産んだ、一方の子を溺愛し、考えられるあらゆる気づかいを払って世話をし、他方の子は可愛がらずに、なおざりに育てた。ところが母親が可愛がっている方の子を頻繁に愛撫したために窒息させてしまった。他方なおざりにされた子はすくすくと育った。)⁶⁾

ここでも、「個のサル」というべきところで、「種としてのサル」(〈die Affen〉と定冠詞つきの複数形) が語られているので、(Fabel) では無いとし、(Fabel) としては次のように成るとしている。

(Eine Aeffin, erzehlt er, hatte zwey Junge; in das eine war sie nährisch verliebt, an dem andern aber war ihr sehr wenig gelegen. Einmalls überfiel sie ein plötzlicher Schrecken. Geschwindigkeit sie ihren Liebling auf, nimmt ihn in die Arme, eilt davon, stürzt aber, und schlägt mit ihm gegen einen Stein, daß ihm das Gehirn aus dem zerschmetterten Schedel springt. Das andere Junge, um das sie sich im geringsten nicht bekümmert hatte, war ihr von selbst auf den Rücken gesprungen, hatte sich an ihre Schultern angeklammert, und kam glücklich davon.) (1匹のメスザルに2匹の子どもがいたが、一方の子をあきれほどに溺愛し、他方の子のことはほとんど気にとめていなかった。あるとき急激な驚きが彼らを襲った。メスザルは素早く可愛がっている

ほうの子をたぐりよせ、腕に抱いてその場から急ぎ立ち去ろうとしたが、子どもを抱いたまま石に突き当たってしまったので、その子の打ち砕かれた頭から脳が飛び出してしまった。メスザルが全然気にもとめていなかった別の子の方は自分から母親の背に飛び乗り母親の肩にしがみついた、そして難を逃れた⁷⁾

こちらでは、「サル」も「1匹のメスザル」(〈eine Aeffin〉)としている。このようにレッシングは、〈Fabel〉はあくまでも具体的な事実に根拠を置くものでなければならないとしている。

ヘルダーの場合もレッシングと同じような見解を取る。

ヘルダーは、彼よりもほぼ1世紀前の作家アンドレア (Johann Valentin Andreae, 1586-1664) の二つの作品(「キリスト教の神話〈christliche Mythologie〉」と「人間生活の道徳と悪徳の姿〈Bilder von Tugenden und Lastern des menschlichen Lebens〉」)を同時代の人々に紹介しているが、その際アンドレアが自分の作品について〈Apolog〉(教訓談)と呼んでいるのに対して〈Parabel〉と呼んだ方が相応しいとして、次のように彼の〈Parabel〉論を展開させている。

「〈Parabeln〉の場合には、〈Dichtungen, Fabeln〉という語はあまりにも漠然としているように思われ、〈Embleme, Denkbilder〉という言い方は変化のある、機智に富んだ作品にはあまりにも狭すぎるように思われる。〈Apolog, Märchen〉は全く使えない。そういうことであるから、この〈Fabel〉と〈Embleme〉の混じりあっ

たジャンルを〈Parabel〉と呼んだらどうであろうかと私は思う。〈Parabel〉は〈Gleichnißrede〉(比喩的な話)であり、普通の生活からの教訓を露わにするというよりも教訓を包み込むこと、覆い隠すことに向かう物語なのである。従ってそれはその中に象徴的なものを含んでいる。」「要するに、〈Parabel〉は、〈Fabel〉(寓話)と〈Emblem〉(シンボル)と〈Allegorie〉(アレゴリー)と〈Personifikation〉(擬人化)の真中に位置し、ベールが取り除かれるとその広い肩に最も困難な格言も最も容易な格言も担うことができる詩歌の種類である。」⁸⁾

ヘルダーのこのような〈Parabel〉観は当時かなり受け入れられていたようで、その影響を受けたクルマハー (Friedrich Adolph Krummacher, 1767-1843) の『寓話論 (Parabeln)』もかなり広く読まれたようで、ゲーテもこの著書を高く評価し、同じような〈Parabel〉観に立っていたとみることがができる。ヘルダーは、多様な要素を包み込んだジャンルとしてサアディー (Sa'di, 1213?-1292) の〈Parabel〉にも関心を示していた。

ゲーテは、「注と論考」の中の「一般的なこと」という項目で、ペルシア文学の多様性について触れて次のようなことを述べている。

「ペルシアの詩人たちの多産性と多様性は、外界の見渡しきれない広がりとその無尽蔵な豊かさに由来している。すべての対象が同じ価値になってしまうたえずめまぐるしい社会生活がわれわれの想像力の前で波を打っているので、彼らの比較対比は非常に特異に見え

て好ましく思えなくなる。彼らはなんのためらいもなく最も高貴な形象と最も下賤な形象を結びあわせる」⁹⁾

「そのうえ、オリエントの詩人にとっては、われわれを地上から天上にひきあげ、そしてそこからまた地上へ突き落としたり、あるいは、その逆をやったりすることは、何の造作もないことなのだ。」¹⁰⁾

そしてそのような例として、腐った犬の死骸について、眺めている群衆が見落としていた犬の白い歯の美しさを指摘しながら、そこから見事に道徳的な見方を導き出しているニザーミー (Nizami Gandjawi, 1141? - 1209?) の詩編を紹介している。

主イエスが世間を経巡り

あるとき市場にさしかかった

ある家の門前に引き寄せられて

死んだ犬が路上に横たわっていた

群衆がその死骸を取り巻いていた

腐肉に群がる禿鷹のように

ひとりの男が言った「おれの脳が

この悪臭で麻痺してしまう」

別の男が言った「迷惑なことだ

墓穴堀は禍をもたらすのみに」

こうしてめいめいが思い思いに

犬の死骸をいやしめた

さてイエスの番になった

主はいやしめることなく、良い心情で

生来の思いやりからこう語った

「歯は真珠のように白い」

この言葉が、取り囲んでいる人々を

火あぶりにされた貝のように、熱くした¹¹⁾

この詩編の表す寓意について、ゲーテは、次

のように解説している。

「愛情深く、機智に富んだ預言者が、彼独特のやり方で憐れみと温情を求めると、誰もがうろたえる。主はなんと力強く、動揺している群衆をわれにかえらせ、忌まわしいものとしてはねつけ呪っていたことを恥じさせ、目もくれていなかった美点に気づき、それどころかおそらくは羨望の気持さえ起こして、観察させることができたのであろうか。周りに立っている者たちは、今度は自分の歯並びのことを思う。美しい歯というものは、どこでも、とくにオリエントにおいては、神の贈りものとして極めて好ましいものである。腐りつつある生きものは、あとに残った完全なものによって、感嘆と最も敬虔な反省の対象となる。」¹²⁾

ここからわれわれは、ニザーミーの思慮深い考察と、立ち並ぶ1人1人の心の中に自分の迂闊さに気づかせ恥じ入らせた巧みさに対するゲーテのニザーミーへの深い共感を感じ取ることができる。

「寓意の巻」は、1827年の決定版全集第5巻発行の際に追加された2編(第3の「奇蹟の信仰」と第7の「釜に向かって」)を加えて、10編から成り立つ。

この「寓意の巻」に関して、「注と論考」の「将来のディーヴァーン」の中で冒頭に引用した部分に続けて次のように述べている。

「寓意や道徳に関するその他のオリエントの文学様式は、三つの異なる項目に、つまり倫理的、道義的、禁欲的というように手際よく分けることができよう。第1の項目のものは、人間全般とその状況に関して、出来事や暗示的なことを内容にしている、その際、何が良くて、何が悪いかは表明することはな

い。この点については、主に第2の項目によって取り上げられ、聞き手に思慮深い選択を準備させる。それに対して、第3の項目は、断固とした強制を加え、道徳的な示唆は命令となり、法令となる。¹³⁾

ゲーテは、この後に第4の項目と第5の項目をあげている。第4の項目は、神の意志への絶対的な服従、何人といえども一度定められた自分の運命を回避することはできないというイスラームの寓意、第5の項目は、神秘主義的な寓意であることを指示している。ただ、「寓意の巻」に収めた10編の詩について、それがどの項目に当てはまるかと言うことについては触れず、「今回われわれが提示したものがどの項目に当てはめたら良いのかは、賢明な読者に委ねよう¹³⁾」としている。

「寓意の巻」の第1の詩：

空から激しい波しぶきの中にひとつぶの滴が
おびえつつ落ちると波が恐ろしくそれに打ちかかった
だが神はつつましい信仰の心に報いて
その滴に力と持続とを与えた
物静かな貝がそれを閉じ込めてくれた
そしていまや永遠に称えられ報われて
真珠はわれらの王の冠の表面で輝く
やさしい視線と穏やかな光をともなって¹⁵⁾

この詩は、1815年の初めから5月末の間に制作されたものとされていて、5月30日100編の詩の表題を整理した「ヴィースバーデン目次表〈Wiesbadener Register〉」では32番目に「信仰心のあつい真珠〈Gläubige

Perle〉」としてあげられている。また、「真珠の恭順〈Perlendemuth〉」と題されたこともあった。このような題が付されているように、この詩は、真珠の輝きの奥には水滴から真珠に出来上がるまでの長い苦しい道程と信仰の力が潜んでいることを言おうとしているのであろう。

この詩は、サアディーの『果樹園（ペルシアの果樹園〈Der Persianische Baumgarten〉）』に拠っている。この部分に関しては、4通りの形で紹介されていた。第1は、ジョーンズ（Sir William Jones, 1746-1794）の『アジア文学評釈〈Poeseos Asiaticae〉』の中でラテン語で、第2は、シャルダン（Jean Chardin, 1643-1713）の『ペルシアへの旅〈Voyages du Chevalier Chardin, en Perse〉』の中で、¹⁶⁾ 第3は、オレアーリウスのドイツ語訳で、第4は、『オリエントの宝庫〈Fundgruben des Orients〉』の第1巻の中でシェズィ（Antoine-Léonard de Chezy, 1773-1832）によって訳された「サアディーの寓話」という形で。マイヤーによるとゲーテのこの詩の原稿には、「サアディー、寓話、『オリエントの宝庫』、第1巻、94ページ〈Saadi, Apolog, F Gr I.94〉」とあるということなので、¹⁷⁾ ゲーテはシェズィに拠ったことになる。シェズィでは次のようになっている。

雨の滴

サアディーの寓話

ひとつぶの明るい滴が天の水郷から
下の地上の海のふところ深くすべり落ちた
滴は海原が深遠で広大なのを知ったとき

自分が落ちてきた水滴であることに、ふるえ、溜息をついて言った

「何という壮麗さだ、何とすばらしく見えることだ

これが存在だとすれば、自分の運命はいたい何なのか、

わたしは何の存在でもない、単なる水の飛沫にすぎない

計り知れない青海原の中でわたしは消えなければならぬのだ」

そういつて深い悲哀の中に沈んでいたとき貝がそれを捉えて飲み込んだ

するとそれは選り抜きの真珠になった

王冠に飾られそれは間もなく歓びに輝いた壊滅の暗い門前で全く慎ましやかに

じっと待っていたために、最も美しい存在になった

〈Das Regentöpfchen

Apolog von Saadi

Ein helles Tröpfchen sank von Himmels Auen,

Glitt tief hinunter zu des Weltmeers Schoos,

Und da es sah die Fläche hehr und groß

Erseufzt es bebend im Herniederthauen:

“Welch hohe Pracht, herrlich anzuschauen

“Ist dies das Daseyn, was ist dann mein Loos?

“Ich bin ein Nichts, ein Wasserstäubchen blos,

“Muß hier vergehn im unermeßnen Blauen!”

Und wie es so versank in stiller Wehmuth,

Fing's eine Muschel auf in ihre Brust, Da bildet sich's zur Perle auserkohren.

Am Diademe strahlt es bald mit Lust, Zum schönsten Seyn gelangt, da es voll

Demuth

Geharrt an der Vernichtung dunkeln Thoren.¹⁸⁾

オレアーリウス訳では以下のようにになっている。

小さな一滴の水が雲の中から海に落ち、海の大きさと深さに驚いて言った、

「この巨大な海と対抗してわたしにはどれほどのことができようか、

恐らくごくわずかなこともできまい。」

自分の姿を卑下した目で見つめている間に1つの貝がやって来て、その滴を飲み込んだ

天の運行と星のめぐり合わせはそこからやがて真珠が生まれるように計らった。

それはへりくだっていたので、称揚された貧しさと戦っていたので、豊かで、高価なものになった。

〈Ein Tröpflein Wasser/ so aus dem Wolcken ins Meer fiel/ verwunderte sich über desselbigen Größe und Tieffe/ und sprach: Was bin ich gegen dem ungeheuren Meer zu rechnen? warlich nicht das geringste. Unterdessen er sich selbst mit so niedrigen Augen ansahe/ kahl eine Muschel und

schluckte das Tröpflein ein; Des Himmels Lauff und das Stern-Geschicke behandelten die Sachedergestalt/ daß daraus mitler Zeit eine Perle ward/ da wurde es erhoben/ weil es sich erniedriget hatte. Es wurde reich und köstlich/ weil es sich mit der Armuth überworffen hatte.)¹⁹⁾

そして、この後に次のような詩句が続いている。

賢明で分別のある人間は謙虚であることに努める

たわわに実る樹木は垂れ下がる、常に頭を大地に向けて曲げているものだ。

(Ein weiser und verständiger Mann befließiget sich der Erniedrigung. Ein Baum der voller Früchte hänget/ beuget allerzeit sein Haupt zur Erde.)

この詩が収められているのは、「第4部 へりくだり、謙虚、人付き合いの良さについて」の第1章「人は賢明になり、分別が増せば増すほど、謙虚になる」の部分であり、この第1章では上の詩句の前に以下の文がある。

「おお人間よ、聖なる神はお前を土から造られたではないか。だから、おまえがそれと同じようになるため、大地のようにへりくだれ。食欲になるな、利欲にかられるな、あるいは、傲慢になるな、そして、怒り舞い上がりを示す火のようになるな。大地は謙虚にへりくだっているのです、神は火から悪魔をそし

て土から人間を作りたもうたのだ。」²⁰⁾

こうしてサアディーの詩文の省かれている部分を並べてみると、ゲーテの詩の寓意の意味するところも理解できることになるし、「真珠の恭順」と題されたこともあるのも首肯できる。人間はえてして傲慢になりがちである。年齢ですら傲慢の道具に成り得る。宗教の別なく、民俗の別なく常に傲慢を諫めることが言われる。中国革命の最高指導者であった毛沢東ですら「たとえわれわれの仕事が非常に大きな成果をあげたとしても、なんらおごりたかぶり尊大になる理由にはならない。謙虚は人を進歩させ、おごりは人をおくれさせるのであって、われわれはこの真理をいつまでも銘記しておくべきである。」²¹⁾と述べている。

上のサアディーの詩句もそれに基づくゲーテの詩も謙虚であることの大切さをとりあげているといえるであろう。

ところでここでアーダム・オレアーリウスが13世紀ペルシアの詩人サアディーの作品をドイツに紹介することになる契機についてふれておくことにする。

シュレースヴィヒ・ホルシュタイン・ゴットルフ公国の公爵フリードリヒ3世(1597-1659)は、利潤の大きいオリエントとの貿易を思い立ち、その準備のための使節団を貿易の経路となるロシアと貿易国のペルシアへ派遣する計画を立て、オレアーリウスはその使節団の書記官として雇われる。使節団の一員としてペルシアに渡ったオレアーリウスは、王への書簡の返事を待つ間ペルシア人の教師からペルシア語を学ぶ機会を見つけペルシア語を習得するが、彼にペルシア語を教えた人物がサアディーの作品を渡してペルシアにも

このような優れた詩人がいることをドイツにも紹介して欲しいと翻訳を依頼する。帰国したオレアーリウスは、その後ゴットルフにやって来たペルシア大使の随員のうち、帰国せせずにゴットルフに留まったハクウィルディと言う人物の協力を得て翻訳に取り掛かる。ハクウィルディは亡くなるまでオレアーリウスの家に留まり、オレアーリウスの翻訳事業に協力したと言われている。

こうしてオレアーリウスは、サアディーの『バラ園 (ペルシアのバラの谷 (Persianische Rosenthal))』と『果樹園』を翻訳した。彼はこの他に、800ページに及ぶ膨大な『旅行記』を残している。そして全6編のうちの第5編目全部の中で、ペルシアの風土、ペルシア人の体つき、衣食住、婦人たちのこと、結婚式や埋葬のこと、子どものしつけや学校のこと、ペルシア語やペルシアの詩歌や詩人のこと、政治のこと等について彼がイスファハーンに着いた1637年8月3日からそこを立つ12月21日までの間に、実によく観察し、それに基づいて記述している。彼の研究成果はドイツにおけるオリエント研究に先鞭をつけるものだった。

ゲーテは、『西東詩集』の「注と論考」に「オレアーリウス」の項をあげて、その中で次のように述べている。

「彼はきわめて喜ばしい啓発的な旅行記をわれわれに贈ってくれた。しかもその旅行記は、次のような理由によってなお一層価値あるものとなっている。つまり、彼は、ピエートロ・デッラ・ヴァレの少し後のアッバース大帝没後間もない時期にペルシアに行っており、帰国してからは、優れた好ましい翻訳によって、卓越したサアディーをドイツ人に知

らせてくれたのだ。」²²⁾

ピエートロ・デッラ・ヴァレ (Pietro della Valle, 1586-1652) は、イタリアの旅行家。エルサレムに巡礼の旅に出た後、オリエントを旅行し、インドにまで足を延ばして帰国後、旅行記を書いたが、それがヨーロッパで広く読まれた。ゲーテもピエートロ・デッラ・ヴァレをオリエント研究のための恩人と見なして、「注と論考」の中に1項目を挙げて謝意を示している。

「寓意の巻」の第2の詩：

美しい鳴鳥ビュルビュルの夜の歌が驟雨の中を
アッラーの明るい王座にまで届いた
するとその快い調べに報いるために
アッラーはビュルビュルを黄金の入れものに入れてやった
その入れものというのは人間の五体である
狭い思いをしたものの
しかし事情をよく考えた上で
この魂はいつまでも歌いつづけた²³⁾

この詩も、1815年の1月から5月末の間に制作されたものとされており、「ヴィースバーデン目次表」では64番目に「ビュルビュル (Bulbul)」としてあげられている。ここでは、魂がビュルビュルに喩えられている、肉体という檻の中に閉じこめられた魂は窮屈な中でも絶えず自由を求めて小鳥のように囀る。魂は何ものにも拘束されたくはない。魂を小鳥に喩える表現はペルシア文学の詩法に従っており、ゲーテはそれを『オリエントの宝庫』第2巻に収められているハラハ (Carl

Graf von Harrach) による〈Nigaristan〉の翻訳〈Quaedam ex libro Nigaristan〉の中の「魂の小鳥が翼を広げ、飛び始めながら響きよい歌を歌いつつ、自分が生まれた巣に向かおうとする」「この魂と呼ばれる捉えられたサヨナキドリは彼の檻である身体に従おうとはしない」などによっている。²⁴⁾

また魂を小鳥と見立て、体を檻とみなし、その中の窮屈な思いをする魂と言う表現は、ハーフィズの中にも見受けられる。

快い魂である美しい小鳥は
翼を羽ばたかせて、檻を破り、
7つのドームの屋根の上に止まる
そこで魂は安らぎを得る²⁵⁾

私の心のフェニックスは
最後の天の中にその巣を持っている
体の檻の中に閉じこめられて
それは生きることに飽いてしまった²⁶⁾

「寓意の巻」の第3の詩：

奇蹟への信仰

あるとき一枚の美しい皿を割ってしまった
すんでのところまで絶望せんばかりであった
不器用もの、そそっかし屋
私はのろいにのろった
はじめは暴れるだけ暴れて疲れ果てた
悲しみながらかけらを拾っていると
神さまがあわれに思って
直ぐに元通りに作り直してくれた²⁷⁾

この詩は、1819年の初版には含まれてお

らず、1827年の決定版の際に追加された。シャルダンの『ペルシア旅行〈Voyages en Perse〉』でシャルダンが、ガラス工場を見学した際のことを述べて、次のようなことを言っているのによる。

「壊れたガラスはまた直せる、人間は、死が破壊した後で、どれほどまでに回復されるのか。」²⁸⁾

ガラス工場で火の力で回復したものを、この詩では奇蹟への信仰の深さによって回復できることを述べようとしているのか。

「寓意の巻」の第4の詩：

貝から抜け出た真珠
生まれが良くて、極めて美しい真珠が
人のいい宝石商に言った
「私はおしまいですわ
あなたが私の美しい完全な姿に穴をあけたら
もう台無しだわ
姉たちと一緒に次々につながれて
見栄えのしない仲間に加わってしまうので
すもの」

「私は今は儲けのことしか考えられない
許してもらわなければならない
ここで心を鬼にしなかったら
どうして首飾りができるというのだらう」²⁹⁾

この詩も1815年の1月から5月までの間に制作されたもの。「ヴィースバーデン目次表」では33番目にあげられていて、「真珠の反抗〈Perle Widerspänstig〉」と題されている。首飾りを作ってそれで商いをしたい宝石商に

としてはどんなに美しい真珠であっても、それは多くある真珠という材料の1つに過ぎない。「ヴィースバーデン目次表」のタイトルが示すように真珠は「個」としての立場を主張するが、「個」は通常全体のために犠牲にならざるを得ない。

「寓意の巻」の第5の詩：

私は1本の孔雀の羽がコーランにはさまれているのを見
驚きもし満足もした
地上で作られるもののうちの最高の宝よ
ようこそ、この聖なる場所へ
天の星々によってのように、おまえによって
小さなものの中に神の偉大さを知ることができる
神は世界を眺め廻して
ここにその目を押し当てられた
そうして軽やかな羽毛を飾られた
王たちが鳥の華やかさを真似ることに思い
及ばぬほどに
つつましくその名誉を楽しめ
それでこそおまえはこの聖なる場所に相応しいのだ³⁰⁾

制作されたのは1815年3月17日、「ヴィースバーデン目次表」では「孔雀の羽 (Pfaunenfeder)」となっている。コーランは、イスラーム教徒の間では神が直接アラビア語でムハammadの口を通して語りかけたものであり、非常に神聖なものとされている。その聖なるコーランのページの中に孔雀の羽がはさまれていた、第2の詩の中で小鳥が魂

を表すものとされていたが、その延長で孔雀の羽も魂の象徴と見ることもできるが、魂が聖なる神の言葉に包まれることの喜ばしさを示すものと考えられる。この詩は、サアディーの『バラ園』の次のような表現に拠っている。

「私は、美しい羽毛がコーランのページの間に挿まっているのを見つけて、それに言った。『おまえがそのように素晴らしい本の中に居られるという栄誉は、何に基づくのか』と。羽毛は、すかさず答えた『美しいものは、常に醜いもの以上に、自分の欲するところに自由に足を踏み入れることができるもの、そして、誰の手も、それを容易には引きぬけのもの』と。」³¹⁾

「寓意の巻」の第6の詩：

ある皇帝が2人の出納係を雇っていた
1人は歳出のために、もう1人は歳入のために
後者の手からは出てゆくばかりであった
前者の方はどこから取り入れればよいかわからなかった
歳出の係が死んだ、皇帝は歳出の係を誰に任せたらよいかわからなかった
ところが途方にくれているうちに
歳入の係がとてつもなく金持になった
1日まるまる何の支出もなかったので
金のために身動きが取れなくなってしまった
そこで初めて皇帝は気づいた
何がすべての禍の元になっているのかを
この偶然を尊重することを良く心得ていて
2度と再びその地位に人は就けなかった³²⁾

制作は1815年2月25日。「ヴィースパーデン目次表」では38番目、「出納係〈Cassiere〉」となっている。この詩では、実際の生活の中で実務的なことの大切さについて触れていて、ディーツが翻訳した『カーブースの書〈Buch des Kabus〉』の中の次の文と関連づけられる。

「お前は正確な帳簿係にならなければならぬ、つまり、お前は王の収入と支出を良く知り、財産が浪費されないように注意しなければならぬ。誰から取らなければならないか、誰に与えなければならないかを知るために、取引のことを熟知していなければならぬ。」³³⁾

『カーブースの書』というのは、10世紀から11世紀にかけてタバリスターンのカスピ海地域を治めていた小王朝の君主カイ・カーウースが、やがて迫り来る自分の小国の崩壊を予見して、息子ギーラーン・シャーのために、人生のどのような場合にも対処できるだけの処世術と知識を授けておきたいという気持から、老年になってから書き記した教訓の書で、名著の1つとされている。ディーツはこれをトルコ語、ペルシア語、アラビア語から翻訳したとしている。ゲーテは、このディーツの翻訳が多くドイツの読者に読まれるようにとの配慮から「注と論考」の「フォン・ディーツ」の項の中で『カーブースの書』の目次をあげて紹介している。³⁴⁾

「寓意の巻」の第7の詩：

新しい深鍋がやかんに言った
何という黒いおなかをしているんですか—
われわれのところではこれが台所の慣わし

だ
こっちへ来たまえ、すべすべした間抜けさん
間もなく君の誇りもしぼむだろう
把手が明るい顔をしているからといって
お高くとまるのは止したまえ
お前さんの尻をよくよく見るんだな³⁵⁾

1818年3月17日に制作されて、1827年の決定版のときに追加されたもの。

この詩は頑固に自己の立場を固執するところからくる揚げ足取りやあら捜しに対する警告と見ることができるが、この詩の成立に関して、カタリーナ・モムゼン (Katharina Mommsen) は、共にゲーテのオリエント研究の大きな支えとなってくれた2人の知人、ディーツ (Friedrich von Diez, 1751–1817) とハマール＝プルクシュタル (Joseph Freiherr von Hammer-Piurgstall, 1774–1856) の間に展開された醜いあら捜しの論争との関わりを指摘している。ディーツはプロイセンのトルコ大使として、ハマール＝プルクシュタルはオーストリアの外交官としてトルコで活躍した後で、退役後共にオリエント研究に専念した人物であるが、この二人の間に大きな亀裂が生じていた。事の起こりをディーツの側から見ると、ウィーンのオリエント文化愛好会編の『オリエントの宝庫 (Fundgruben des Orients)』への投稿をゼヴスキ (Wenzeslaus Rzewuski、ポーランドの伯爵、愛好会の経済的な支援者) の名において求められた。ディーツは、ゼヴスキの社会的地位などから判断してこの雑誌への寄稿を承諾して原稿を送った。ところがそういう場合には常識となっているはずの原稿を受

け取ったという返事が来ない。そこで、ディーツは原稿受領の返事が来ない限り、これ以上原稿を送るつもりはないと連絡する。それにも何の音沙汰もない、そのうち『オリエントの宝庫』の第1巻の第3編が送られてくる。見てみるとそこにはディーツの訳した詩も掲載されている。更に驚かされたことには匿名の編集者によって訳者ディーツに無断で7つの注が付されている。その注の意図も、ひとつにはディーツの発音表記を訂正するためのもの、もうひとつは原典の意味が訳されている意味とは違っていることを示すものだったという。³⁶⁾ また、巻末にある目次にはディーツの作品のものは欠けている。

このようなことがあってから、ディーツには、彼の訳に無断で注をつけた人物、そしてゼヴスキの名において寄稿の依頼をしてきた人物が、ハマール＝プルクシュタルであることが分ってくる。そしてゼヴスキが当時ウィーンに居なかったので、自分の手紙を受け取っておきながら一言の返事すら書かなかったのは、他ならぬハマール＝プルクシュタルであることが明白になる。この時からディーツはハマール＝プルクシュタルに対して深い不信感と激しい敵意を抱くことになる。

1815年12月23日付の手紙でディーツはゲーテに次のように語っている。

「閣下にお約束しておりました『アジア回想録』第2巻をお届けすることができ、大変名譽に思っております。この中の「チューリップとスイセンの栽培」は「キュクロプス」と共に既にご存知のものです。私は閣下が他の項目についても素通りされてしまいませぬようお願いいたします。

量の多い付録には退屈なされるかもしれま

せんが、閣下が辛抱して下さいまして、それを読まないままにされませぬようお願いいたします。お読み下されば、2人のみじめな姿の同業仲間によって、とりわけ全くのぼせ上がった愚か者によってわたしに対してなされている愚行について、正しく判断していただけることと存じます。私としましては愚かで子供っぽく無知なものを無視することもできます。しかし同時に恥知らずな悪意と中傷が私に浴びせられたのですから、自分の意に反して棍棒を取り上げざるを得ませんでした。そしてそれを打ち込み、実際信じられないくらい大きな無知を暴き立てざるを得ませんでした。私がこのようにつまらぬことに自分の時間を失わざるを得ないことを、閣下が気の毒に思ってくださいませよう。」³⁷⁾

ここでディーツが挙げている2人の同業仲間というのは、ハマール＝プルクシュタルとその師であるシャベール (Thomas Chabert) のことであり、「とりわけ全くのぼせ上がった愚か者」というのは勿論ハマール＝プルクシュタルのことである。

ディーツは『アジア回想録』第1巻の中で「オグズの書 (Buch des Oghuz)」としてトルコの格言を翻訳しているが、その中の1行を

〈Mühe sagte der Mühe: dein Hinterer ist schwarz〉

と訳してそれに、「つまり、誰もには自分にあるものを他人において非難する」ということであると注釈を付けた。³⁸⁾ それに対してシャベールは異議を唱え、〈Mühe〉は〈Fleischtopf〉とすべきで、上の詩句は

〈Der Fleischtopf sagte dem Fleischtopfe: dein Hinterer ist schwarz.〉 (肉なべが別

の肉なべに言った、お前の尻は黒いと)
となるべきだとした。³⁹⁾ ここではトルコ語の
語句の理解に関する相違が問題にされている
が、このような両者の間のあまり意味のない
つばぜり合いを快く思っていなかったゲーテ
はこの詩の中で、ここで用いられていた言葉
を用いて彼らの行っている愚行を諷めている
とも取れる。

「寓意の巻」の第8の詩：

すべての人間は、高貴な者も下賤な者も、
細かい網を織り上げ、
できあがるとその真中にとっても優美に
はさみの先で身を支えて座る
ところがそこを箒が1本掠めるようなこと
があると
彼らは言う、前代未聞のことだ
最大の宮殿が壊されてしまうと⁴⁰⁾

1815年3月17日に制作され、「ヴィース
バーデン目次表」の39番目に「自己満足
(Selbstbehagen)」として盛り込まれてい
る。空中に張られたクモの巣のイメージで、
真中に座るのは人間の象徴であるクモであ
る。優美に座っていても、所詮は繊細なクモ
糸の上である。箒の先が触れただけで、簡単
に壊れてしまう、人間の作り上げるものも作
る当人にはどんなに立派に見えても果無く壊
れ砕けてしまうようなものである。

この詩は、ゲーテが掲げた項目のうちの第
1の項目に当てはめることができる。

「寓意の巻」の第9の詩：

天から降りてこられたイエスは
福音の永遠の書をもたらされ
日夜使徒たちにそれを読んで聞かせられた
神の言葉、それは効果を放ち、的を射た
彼は天に戻り、再びその書を持ち帰られた
だが、使徒たちはその言葉を良いものと感
じていたので
めいめいが、心の中に収めておいたとおり
まちまちに1行1行書き留めた
まちまちであったが、特に意味はない
彼らは同じ素質ではなかったのだ
だがキリスト教徒たちはそれによって
最後の審判の日までなんとか生き続けて行
くのだ⁴¹⁾

1815年5月24日の作、「ヴィースバーデン
目次表」では、「59.福音書 (Evangelium)」
となっている。この詩は、シャルダンがその
『ペルシア旅行記』の中で、イスラム教徒が、
キリスト教の聖書やその成立についてどのよ
うに見ているかを紹介した文によっていると
見られている。つまり、シャルダンには以下
のような記述がある。

「私は、ここでキリスト教に対するペルシア
人の見解についての1章を付け加えておきた
い。彼らは、まず、イエス・キリストは『福
音書』という1冊の書物を天から持ってき
て、その中から選ばれた人と呼ばれている弟
子たちに読んで聞かせたと、信じている。

第2に、使徒とその他のイエスの弟子たち
は、彼の偉大な奇蹟や彼の教えの神聖さを見
たり聞いたりしながら、彼が福音書の中で神
の霊として神のお告げとして描かれていると
いうことを知ることにより、彼を真の神と認
め、彼に祈りをささげようとしている。それ

に対する不満からイエスは天に帰ってしまった、そして福音書も一緒に持っていったと、信じている。

第3に、イエス・キリストが福音書を持って天国に帰ってしまった後で4人の彼の弟子が、イエスが読んで聞かせたことやイエスがするのを見たことを記憶に留めておいて、それぞれが記憶していることを書き記すように努めたということ、そして、キリスト教徒が福音書と呼んでいるものは勿論決して天からもたらされた真の福音書ではなくて、イエスが神であるというような、彼らの預言者に関するの編集者の先入観に満ちた人間の作品であるということ、この書物の中では決して明確には叙述されていないために、キリスト教徒は常にイエス・キリストの神性については、それが真実なのかあるいは伝承によるものなのかについて激しく論争しあっているのだ、というように信じている。」⁴²⁾

イスラーム教徒は、イエスの神性を否定し、イエスをモーゼやムハンマドと同様に預言者としてしか見ていない、ただムハンマドの方が後から登場して来た預言者なのだからムハンマドの言うことの方が正しいと見る。上の詩ではそのようなことを紹介している。

「寓意の巻」の第10の詩：

それでよし

天国の月明かりの中でエホバはアーダムが深い眠りにおちいつているのを見つけ
その脇にエヴァをそっと置いてやった。エヴァもまた眠り込んだ
これで神の二つの最も好ましい考え出した

ものが
地上の柵の中に横たわった
よろしい と神は自分の傑作に呼びかけた
神はその場をなかなか離れられなかった

爽快な気分で眼が眼を見つめると
魅惑されるのも不思議ではない
私たちを考え出してくれた方のもとにおられるほどに
事柄が運んだような気持になる
さあ、こい と神が私たちに呼びかけられた
どうかふたり一緒にと私は条件をつけよう
おまえをこの腕でしっかりとつかまえている
あらゆる神の考え出したものの中で最も愛らしいものよ⁴³⁾

1815年5月4日、2度目のライン・マイン地方への旅の初め頃に制作された。「ヴィースバーデン目次表」の60番目に「神の考え (Gottesgedanken)」として入れられている。

『旧約聖書』の創世記第2章の場面が思い起される、神は眠っているイシュ(男)の体からあばら骨を取り出して、それで女(イシャ)を作ってそっと男の脇に置いてやった。目ざめた二人は互いを発見して、相互に魅惑され、愛が生まれる。創世記では、この後2人は、悪魔の誘惑に乗り、禁断の果実を食うが、この詩ではアーダムがイブを見出したところで、つまり、喜びの絶頂で、終わっている。

この詩は、先にあげたゲーテの示した五つの項目のうち、第4の「神の意志への絶対的

服従」の中に含めることができる。

ゲーテは、「注と論考」の「将来のディーヴァン」の冒頭で次のようなことを語っている。

「ドイツでは、一時期かなりの印刷物が友人たちの稿本という形で配布されたことがあった。このことを意外と思う人は、書物というものとは結局のところ関係者、友人、著者のファンたちのためにだけ書かれるものだということを考慮に入れてもらいたい。とりわけ、現在の版が不完全なものとしか見なされ得ないわたしのディーヴァンについてはそのように受け止めてもらいたい。もっと若い頃であったら私はこの詩集をもっと手もとに置いておいたであろうが、ハーフィズのように纏める仕事を後の人々に委ねるよりは、自ら編集した方が良く判断したのである。というのは、この小冊子が現在提示できる形で存在しているということが、この小冊子に対して相応しい完全さを次第に加えて行こうという私の望みを掻きたててくれるからである。」⁴⁴⁾

このように、ゲーテは1819年『西東詩集』初版本を出版した時の心境を語っていて、その後1827年の全集の中に収めるときには、2編の詩を追加したけれども、「寓意」に関するゲーテのオリエントからの「まねび」についてはこの10編で完結したものと受け止めて良いであろう。

注

- 1) Johann Wolfgang Goethe Sämtliche Werke nach Epochen seines Schaffens, Münchner Ausgabe, hrsg. von Karl Richter in Zusammenarbeit mit Herbert
- G. Göpfert, Norbert Miller, Gerhard Sauder und Edith Zehn (以下M.Aとする). Bd.11.1. 2.S.213.
- 2) Leiden, 1960-2004, vol. VI, p.815ff.
- 3) 『イソップ寓話集』、中務哲郎訳、岩波文庫 103-1、105,106ページ。なお、この部分にはつぎのような注記がある。
「海狸の生殖器：北方の遊牧民プティノイ人は川獺や海狸の睾丸を子宮病の薬にしたという（ヘロドトス『歴史』、4、109）。ヒポクラトスによると、海狸（カストール）の鼠蹊部の囊から採れる海狸香（カストリオン）は子宮の様々な病気に処方され（「婦人の自然性について」32他）、奇胎を流し出すには海狸の睾丸を飲ませるとも言う（「婦人病 一」71）」
- 4) Gotthold Ephraim Lessings Sämtliche Schriften, Hrsg. Von Karl Lachmann, Stuttgart, 1886-1924, Bd.7. S.441.
- 5) ibid. S.442
- 6) ibid.
- 7) ibid.
- 8) Herder Sämtliche Werke, Historisch-kritische Ausgabe, hrsg. von B. Suphan, 1877-1913, Bd.16, S.164.
- 9) Bd.11.1.2. S.167f.
- 10) MA, Bd.11.1.2.S.168.
- 11) MA, Bd.11.1.2.S.168f.
- 12) MA, Bd.11.1.2.S.169.
- 13) MA, Bd.11.1.2.S.213f.
- 14) MA, Bd.11.1.2.S.214.
- 15) Sir William Jones, Poeseos Asiaticae, p.288f.
- 16) MA, Bd.11.1.2.S.679.
- 17) Goethe, West-östlicher Divan, kritische Ausgabe der Gedichte mit textgeschichtlichem Kommentar von Hans Albert Maier, Kommentar, Tübingen, 1963. S.386.
- 18) Fundgruben des Orients, Bearbeitet durch eine Gesellschaft von Liebhabern. Auf Veranstaltung des Herrn Grafen Wenceslaus Rzewusky (Hg. Von Joseph Frh. Hammer von Purgstall) Bd.1. S.94.
- 19) Olearius, Der Persianische Baum-Garten/ mit außerlesenen Propffreisern vieler

- Geschichte/ Seltsamen Begebenheiten/ Lehrreichen Historien und merckwürdigen Sprüchen bepflanzt: In Persianischer Sprache beschrieben durch Schich Musladie Saadi von Schiras; Und Umb seiner Vortrefflichkeit willen aus der Persischen in die Niederländische und aus derselben in die Hochdeutsche Sprache gebracht. Hamburg, 1696. S.49.
- 20) *ibid.*
- 21) 社会主義研究所、毛沢東語録研究会 編訳、『毛沢東語録』、昭和41,226ページ
- 22) MA, Bd.11.1.2.S.251.
- 23) MA, Bd.11.1.2.S.107.
- 24) Fundgruben des Orients, Bd.2. S.108f.
- 25) Mohammed Schemsed-din Hafis, Der Diwan, Aus dem Persischen zum erstenmal ganz übersetzt von Joseph von Hammer-Purgstall, Bd. II, S.496.
- 26) *Ibid.* S.308.
- 27) MA, Bd.11.1.2.S.107.
- 28) MA, Bd.11.1.2.S.682f
- 29) MA, Bd.11.1.2.S.108.
- 30) *ibid.*
- 31) Der Persianische Rosen-Thal: In welchem viel lustige und angenehme Historien/ scharffsinnige Reden/ nützliche Lehr-und Grund-Regeln/Sententzen und Sprüche enthalten; Ein Werck/ welches ohngefahr vor 500 Jahren von dem damahls berühmten und tieff-sinnigen Poeten Schich Saadi In Persianischer Sprache beschrieben/ seiner Würdigkeit wegen hoch gehalten/ von vielen geliebet/ und endlich vor etwan 50 Jahren von dem berühmten Authore Adamo Oleario, Mit Grosser Mühe und Zuziehung eines alten Persianers/ Nahmens Hakwirdi, übersetzt/ und in Hochdeutscher Sprache herausgegeben/ nunmehr aber wiederumb auffs neue auffgeleget / und mit vielen Kupffer-Stücken geziehret. . Hamburg, 1696, S.54.
- 32) MA, Bd.11.1.2.S.108f.
- 33) Buch des Kabus oder Lehren des persischen Königs Kjekjawus für seinen Sohn Ghilan Schach. Ein Werk für alle Zeitalter aus dem Türkisch - Persisch - Arabischen übersetzt und durch Abhandlungen und Anmerkungen erläutert von Heinrich Friedrich von Diez. Berlin, 1811. S.772.
- 34) MA, Bd.11.1.2.S.259f.
- 35) MA, Bd.11.1.2.S.109.
- 36) Denkwürdigkeiten von Asien in Künsten und Wissenschaften, Sitten, Gebräuchen und Alterthümern, Religion und Regierungsverfassung aus Handschriften und eigenen Erfahrungen gesammelt von Heinrich Friedrich von Diez. (以下DA とする) Zweyter Theil, S.483ff.
- 37) C. Siegfried, Briefwechsel zwischen Goethe und Diez. Goethe-Jahrbuch. Bd.11, S.36.
- 38) DA, Erster Theil, S.200.
- 39) Jenaische Allgemeine Literatur-Zeitung, Januar 1813, Sp.60.
- 40) MA, Bd.11.1.2.*ibid.*
- 41) *ibid.*
- 42) MA, Bd.11.1.2.S.689.
- 43) MA, Bd.11.1.2.S.110.
- 44) MA, Bd.11.1.2.S.201f